

の南方で、小原に通ずる路上にあつた。小原が幕府領であつた爲加賀藩から置いたものである。

アトアトオカシマイ **ヘンジョウ** 跡々御賃米返上 ↓ヘンジョウマイ 返上米。

アトジギヘイ 跡地儀平 通稱初め吉左衛門・佐雲・再び吉左衛門。初め御算用者となつて四十俵を受け、次いで小頭新知八十石に進み、天明五年坊主頭となり、次いで組外に列し、寛政九年大小將組御膳奉行に至り、同年御書物奉行に轉じ、十二年九月廿四日歿。子孫相繼いで藩に仕へた。

アトチサダヒテ 阿閉貞秀 通稱淡路守。元龜三年織田信長に降り、近江伊香郡を賜はつた。天正三年九月信長が越前北庄に入つて諸將の配置を定めた時、貞秀に江沼郡を興へた。貞秀と同時に能美郡を受けた堀江景忠は、加賀が向一揆國で貢賦を納れることを得ぬので喜ばなかつた爲、信長は怒つて柴田勝家に誅せしめたが、貞秀のその後の状況に就いては明らかでない。越登賀三州志に貞秀も亦追放せられたのであらうかを記してゐる。後貞秀は明智光秀に従屬してゐる。

アトツギヤマ 跡繼山 鳳至郡熊野と本江との間の坂路の總稱である。能登名跡志に、『熊野村・本江村領に跡繼山として不思議なる風景の名山あり。此山に跡目草として、久しき家の中絶したるも、此草を所持すれば再び家起るといへり。川の流れ山の姿、言語にも絶したる山也。』とある。

アナガマ 穴罾 珠洲郡南方の小字。

アナガマノタキ 穴釜の瀧 珠洲郡松波の小字坪根にある。能登路記に、『此所に穴釜と

て瀧あり。往古穴釜長者として富貴なる者ありて、此瀧壺より酒の出しとあり。今も此瀧壺にいろ／＼の不思議ありといへり。』と見える。

アナグチ 穴口 羽咋郡大坂保に屬する部落。

アナフ 穴生 **ウノ** 城廓の石壁などを築造するものの職名であつた。元來近江國穴生・戸波等は良好の石工を出す地であつたが、加賀藩ではその輩を召抱へて、穴生某・戸波某など呼んで居たが、その後彼等全体を穴生の者といつたものと見える。それが職名として用ひられたことは寛文年間に至つて著しくなり、組外の士から勤務したものも数人あり、元祿の初年までさうした状態であつた。

アナフゲンスケ 穴生源助 前田利家に仕へて、祿五十石を賜はり、御普請奉行を勤めた。孫源次郎に至つて光高より御一行を賜はり、その宛所に奥源次郎とあつて、奥氏を唱へることになつた。それまでは穴生の職で、穴生を氏としてゐたのである。

アナマチ 穴町 金澤の舊町名。穴町といふのは後人の呼び誤つたもので、本名は穴生町であらう。藩初の頃穴生方の者が爰に邸地を賜はつたから、穴生町の稱が起つたものと見える。後に古江伊左衛門上地町ともいうた。

アナミツ 穴水 鳳至郡大町及び川島の惣稱である。之を穴水と稱するは、但馬の安美・豊後の阿南の如く、アナミを以て地名とし、ツは津の意であらう。この地大同三年以前の驛であり、後に正平の頃地頭長正連が附近に城を構へたことによつて、更に城下町たる意義を生じ、前田氏に至つても交通の要衝であつたから、繁榮を續けてゐた。能登名跡志に、

『穴水は七海より十九町あり。入海の奥にありて、此穴水は公領にて、家數三百軒あり。町中に長十間餘の橋あり。川の南を大町といひ、北を川島町といふ。云々。湊は餘程の船着にて、賣買の便ありて、公領一の廣き所なり。云々。昔は此穴水は長家の城下にて、數十軒の家あり。兵亂に退轉せし也。今の家居あるは、出村といふ所なりし也。』とある。

アナミツエキ 穴水驛 能登の古驛。大同三年紀に能登郡穴水驛を廢すといふもので、今の鳳至郡穴水に當る。前驛越蘇と穴水間の連絡は明らかでない。恐らくは水路相接したのであらうかと思はれる。

アナミツガハ 穴水川 ↓コマタガハ 小又川。
アナミツコウ 穴水港 鳳至郡穴水の海面で、港口は南に面し、北方のタケガ鼻と南方のイナヘツミ鼻とに擁せられる。東西六五〇米、南北五五〇米、深さ一一米。その南に乙ヶ崎の支港がある。

アナミツゴウ 穴水郷 王朝時代に穴水郷はなかつたが、貞治五年六月廿五日付穴水來迎寺住有海の謄狀に『穴水郷來迎寺田之事』と見えるを初として、その名が屢現れる。穴水白山社記には、東は中谷村から西は滑谷村、南は曾禰村から北は小俣村に至るまで、都合三十六村を穴水郷とするとある。然るに後世には穴水郷之内大屋庄と稱するものが十村あるばかりで、穴水郷と單稱するものがない。案するに古への穴水郷は穴水郷之内大屋庄と南北郷とに互つてゐたのであらう。

のがあり、七海・川島・大町・上唐川・下唐川・鶴島・藤巻・梶・岩車・天神谷内の十ヶ村が之に屬してゐた。しかしこれより外に穴水郷に屬する某庄といふものはなかつた。

アナミツジヨウ 穴水城 鳳至郡北七海領にあつて、川島の東方に當る。一に立石城とも白波城ともいふ。越登賀三州志に、『穴水城。在河原田郷山岸村山上。』とするものは誤である。又穴水城を長谷部信連が築いたとすることも疑なきを得ぬ。信連は大屋莊の地頭に補せられたので、その城址が宅田に在り、信連の墓も山岸にあるからである。思ふに、穴水城は信連の裔正連が正平の頃この地の地頭となつた後に起つたものであらう。戰國に及んで、天正四年上杉謙信の能登に侵入した時、長綱連は穴水を棄て、七尾城に入つて畠山氏を援けたから、謙信は十月その裨將長澤筑前・白小田善兵衛を置いて之を守らせた。五年五月綱連は謙信の能登に在らざるに乗じ穴水を奪還せんとしたが、閏七月謙信が再び來たのでそれを果さなかつた。六年八月先に安土に赴いた連龍が歸國して一旦之を取つたが、十月越中に去り、八年更に侵入してこの城に居た温井下總を越後に追うた。

アナミツシラヤマシヤ 穴水白山社 鳳至郡穴水なる川島町の産土神で、北の山際白山といふ所に鎮座する。社藏の棟札に天正八年十月十二日長九郎左衛門連龍が神殿一字を再創したといふものがある。

アナミツノキ 穴水ノ井 鳳至郡穴水川島の白山といふ所の江縁から湧出する冷泉をいひ、その所を俗に穴水堂と稱する。又穴水大町の中程の井も同名を以て呼ばれる。穴水の